

百円均一ショップで買ったタツパーからアツサム

ティーのティーバッグを取り出す。紐の先に付いた紙をつまんでティーカップに入れ、電気ポットからお湯を注ぐと、ティーバッグは三角すい型に開き、褐色がかった紅色が透明な湯を侵食していく。高田は気分が落ち着かないときに紅茶を飲むのが好きだった。

高田はもともと、数種の茶葉も、ガラス細工のティーポッドも、紅茶用の湯を沸かすのに便利な小型ケトルも持っていたが、茶葉は捨てたし道具は全てしまつてある。紅茶だけではない。今の高田の家は、必要ないものが全て箱詰めされ、食材はごく最低限しか置いていない。

高田はティーバッグを引き上げて、滴る液体をきつてからティッシュで包み、蓋付きのゴミ箱に捨てる。金メッキのティースプーンで二三回掻き混ぜ、砂糖もミルクも無い紅茶を啜る。

高田はこの二十八日間に同様の夢を十回見た。平均して三日に一回のペースだ。共通の要素はある赤毛のネズミの登場だった。

もともと神経の細かった高田は不安を紛らわすために一ヶ月で二十二回の掃除をし、四回家具の配置を変え、三種類ネズミ駆除の薬を配置し、実家から一週間猫を借り、携帯のメモリーに害虫・害獣駆除会社の電話番号を三社登録したが、結局赤いネズミの毛一本、糞一つも見つからなかった。

やがて自宅で眠れなくなった高田は、夜になると電気を消して布団に入り、暗闇でほんのわずかな物音に聞き耳を立てながら、その音が聞こえるのを恐れていた。そ

の日も高田は布団にもぐりこみ、窓から差し込むわずかな月明かりを見つめてぐったりしていた。結局眠りにつくまでにどれくらいかかったかははっきりしない。

がばつと飛び起きてベッドから転げ落ちるように立ち上がり、その場でぐるりと一周した。朝暴れまわるのは高田の日課だ。寝ている間に体にまとわりついているかもしれないものを振り落とす。物陰に隠れているかもしれないそれを威嚇する。飛び跳ねながらズボンを下ろし、シャツを脱いだ。外気が肌寒くて高田は一層激しく動き回る。

高田はあらかじめ用意してあった手提げバッグを肩にかけ、ガスと電気を指差し確認する。靴を一度ひっくり返してから履き、ドアを勢いよく閉めた。今日は病院に十時から予約を入れている。部屋を出ると高田は安心して溜息を吐き出し、自転車にまたがると逃げるように走り出した。

病院には沢山の人がロビーで呼ばれるのを待っていた。マスクをつけている男、子供をひざに乗せている母親、老人。誰も自分のような馬鹿らしい理由で来ている人はいないだろう、と高田は思う。医者は信じるだろうか。

受付に名前を告げるとすぐに待合室に通された。悩みからくる不眠症であると前もって言っていたので、通されるのは心療内科である。中に入ると看護師の女性がいて、アンケートを渡される。服用中の薬はありますか？

どのような理由で診察にお越しになりましたか？ 待合室には他にもう一人女性が座っていて、ニンテンドーDSをやっている。室内に流れる大人しいクラシックと、戦闘音楽のようなBGMが絡まって緊張した空気を

生み出した。名前を呼ばれて女性はDSをたたみ、淡いピンク色のドアの向こうに消える。人は出てこないし入ってこない。医者と女性の話す声がぼそぼそと聞こえるような気がする。看護師も出て行ってここには誰もいない。自分しかいない。高田が床を見つめていた目をつむると、まぶたの裏にネズミの姿が見えた。鼻息を荒く吐き出しながら目を見開き、おそるおそるもう一度目をつむる。ネズミはいない。診察室から女性が出てくる。「高田さんどうぞ」「はい」

診察室に音楽はかかっていたいなかった。真っ白で清潔な部屋で、ベッドと医師用の机と患者が座る回転椅子がある。一般的な診察室だ。

「いかがなされました」

「眠れないんです。理由に心当たりは、ありません。ネズミが出ます」

「うるさいんですか」

「夢に出るんです。ただ毎日続から、本当にいるんじゃないかと思うと心配で。別にネズミが一匹いるくらい、平気なはずなんですけど、ですがそれが怖くて眠れません」

「なるほど」

「夢といっても毎日なんです」「それは怖くもなるでしょう」

「そうなんです、どうしたらいいんでしょう、眠れないから、他の事もうまくいかなくなって」

「まずは肩の力を抜いて、目が充血していますから目薬を出しましょうか」

その日から高田は『お眠りを健やかにする薬』を使つて眠るようになった。きつちり部屋を片付けてから、今

までのように翌日の準備を済ませ、ベッドに腰をかける。錠剤を流し込んで横になる。次第にまぶたが下りてくると、何も考えずに済むようになる。

さらに高田は医者からアドバイスを貰っていた。不満を内に溜めてしまっているから、発散させようというのだ。運動をしないと云ったら、スポーツを始めると、何かに勧められたが、とてもそんな体力は残っていないように勧められたが、かつたので、高田はどうしようもない日々を日記に残し始めた。まず赤毛ネズミへの不満、自身の苦勞、引越しの希望などを書いた。しかしそれもいつかは尽き、ある日ふと「ついにネズミを見つけて叩き潰してやった」と一文だけ書いて、睡眠薬なしで寝た。それから高田の筆は目を重ねることに進みが速くなり、日記帳に毎日十ページも書くようになったところには、その日記は創作で埋まり、ネズミが夢に出てくることもなくなった。

高田はもう一度病院に足を運んだ。つまり、お礼を言いにいったのだ。それくらい嬉しかった。感謝をしていた。先生を家に招いて、紅茶をご馳走できたらいいと思うほどだった。

「先生ありがとうございます。おかげでよくなりました」

「そうですか、他に何か気になることはありませんか」

「ありません」

「それはよかった。しかし、一時的な躁状態ということが考えられますから、気は抜けません」

「大丈夫です。先生のおかげです」

「ならばひとまず、様子見ですね。来週の火曜あたりでもどうでしょうか……」

こういふのは原因を探り当てて、根治してしまうことが大切です、と言って医者は様々なカウンセリングを試みた。どうやら医者は高田の精神病の再発を疑っている

ようで、高田にはそれが不満だった。

確かに、何が原因で夢が始まって、終わったのか、そもそも完全に終わっているのかもわからない。しかしこんな心穏やかになるようなBGMの下で世間話と心理テストを繰り返して、果たして何が解決するのか。医者はこの外れな原因究明が必要だと考えているのだろうか。だとしても。

自分のことなら自分が一番よくわかる。

高田は病院へ通うのをやめた。それでも、日記に嘘を書き続けるかぎり悪夢を見ることはなかった。ある日高田は、広大なアフリカの大地へ旅に出る日記を書いた。その日の夢は、もちろんサバンナ。シママングースやトビウサギやトムソンガゼルやアミメキリン、そしてジャクソンカメレオンと戯れた後に、体毛が極端に薄く前歯の発達が顕著な、一見ネズミとも分らない奇妙な姿をした一匹のハダカデバネズミと出会った。

目を覚ました高田は考えた。創作が楽しいから、精神的に健やかなになり、ぐっすり眠れているけれど、突然再発しない保障はない。この手でネズミを駆除しなければいけない。日記に書いたことは創作であって、本当のことではないのだ。まだ赤毛のネズミは生きている。

夢のネズミは夢を飛び越え部屋に出てこようとしていたのだ。解決するには一つしか方法はない。創作を現実にする。高田はサバンナへ行くことを決めた。